志賀直哉「或る男、其姉の死」論

――「事実と作り事との混合」という方法をめぐって――

下岡友加

「或る男、其姉の死」は、大正九年一月六日から三月二十八日まで『大阪毎日新聞』夕刊に発表された[1]志賀直哉にとって唯一の新聞連載小説である。この作品は、「大津順吉」（T元・9）、「和解」（T6・10）と共に、作者と父との不和の歴史を扱った、いわゆる「和解三部作」の一つでもあるのだが、その評価は発表当時から今日までいったいに低く、「父子対立の事実を引証することにのみ使用されがちな不遇な作品」（広藤玲子氏[2]）と言える。

作者と父との間に起こった出来事の順に従えば、「或る男、其姉の死」は「『和解』の前に入れるべきもの」（「続創作余談」[3]における作者の言）ということになるが、父との不和を扱う他の二作品と、「或る男、其姉の死」の創作方法とは異なるものであることを作者は次のように述べている。

「大津順吉」「或る男、其姉の死」「和解」これは材料の点から云つて一つ木から生えた三つの枝のやうなものである。「大津順吉」と「和解」は事実、「或る男、其姉の死」は事実と作り事との混合である。（「創作余談」S3・7『改造』）

同じ材料を扱いながら、何故「或る男、其姉の死」のみ、「事実と作り事との混合」といった方法が選択されなければならなかったのだろうか。

「或る男、其姉の死」の主な「作り事」としてあげられるのは、姉の存在、弟という語り手、また実質的な主人公に当たる、兄の家出といった設定である。しかしこれまで、「作り事」の筆頭として専ら考察がなされてきたのは、作品の題の一部を占め、また作者自身もコメントしている[4]姉の存在である。姉の存在とその死を描く、作者の必然については既に多くの論考が存するが、中でも江種満子氏の論は注目されるものである[5]。氏は、姉の死をまず（姉の死の床の描写のもとになったとされる、作者の夢[6]についての幾つかの解釈を検討した上で）作者の実母の死の架空化とみなす。そして厭がら

れれば厭がられるほど姉（つまり実母）の痣に、触れたがる兄（四十章で描かれる）の心理と、けんかになった時、不愉快からその場を立ち去る父を、しつこく追いかける兄（七章に描かれ、それは亡き母の愛情の欠落を、父親にも求めたための行動と弟が解釈している）の心理を同じ「実母憧憬のエロス」ととらえ、「志賀は自身の父子不和の根底に充たされない実母思慕が潜んでいたことを承認することによって、志賀自身の父子不和の歴史に完璧な終止符を打つことができた」と解釈している。

右のような江種氏の見解は、従来「有機的統一性を欠くことは明らか」（亀井雅司氏）[7]とされてきた、姉の死と父との不和という内容を、作者のなかで一つにつなぐ糸を指摘したものとして大変説得力がある。

ただ、この江種氏の説に従う際、少なくとも二つの疑問が生じてくる。一つは「実母憧憬」を描くにしては、その母に当たる姉があまりに不幸で惨めな運命を担わされていることであり、二つ目は、母の死の架空化である姉の死が、何故、兄の家出から九年後に設定されているのかということである。実母の死を虚構を用いて描く際、それを作中のどの時期に設定するかは作者の自由に委ねられていたはずであり、またその死を「人の一生がこんなにして終らねばならぬといふ事は恐ろしい以上、物凄い感じ」（三十七、注：括弧内の漢数字は本文中の章番号を示す。以上同様）とまで、造型した所以は一体どこにあるのだろうか。

本稿は、右のような疑問を解くためにも、これまで十分に議論がなされていない感の強い、兄の家出という「作り事」に着目し、その必要性を中心として検討を行う。そして最終的には、姉の死、弟という語り手といった「作り事」と併せ、「事実と作り事との混合」という方法が、何故に当作品で用いられたのかを考察するものである。

一

兄の家出という「作り事」とは、行き先も不明、何をしているかも不明とされる、兄の二十八歳時に決行された、戻る可能性の殆どない家出を指す。作者自身の経験を考慮すれば、志賀は三十三歳（数え年）の時に父の家から離籍している。この事実が、「或る男、其姉の死」の兄の家出に反映しているものと考える事も出来る。しかし、実際には作者の離籍と、「或る男、其姉の死」の兄の行方不明の様相とは大きく異なる。例えば離籍した作者は祖母に会うため、父との不和の中、別に家をかまえながらも度々麻布の（父の）家を訪ねている。また父の反対を半ば無視して、自身の選んだ女性と結婚をし、家庭をつくってもいる。それに比して「或る男、其姉の死」の兄は、結婚問題から父への悪感情を募らせ、自身の望むような女性との結婚もかなえられずに家出をする。その上、兄が今度自分達

の前に現れるのは「屹度祖母の死ぬ時だらう」（一）と弟の口からは語られる。つまり言い換えれば、死という事態が生じるまで、兄が祖母に会いに来る事は決してないと弟には予測されているのである。実際兄は家出から九年間、姉の死という機会まで家族の前に姿を現す事は全くなかった。そして、更にその後の五年間も兄は行方不明のままであり、弟は姉の死以来、兄に一度も会っていない。

先にも触れたように、姉の死は兄の家出から「九年目」（一）に設定されている。この九年間における兄の変貌ぶりが、作品冒頭、弟によって姉の臨終の床での再会が思い起こされながら、「どうすればかうも変つたらうと驚きました」（一）と語られる。そして、ここではその兄の変貌の内実が何等詳しく語られる事がないために、一体兄がどのように変わったのか、変わる前はどのような様子だったのかという事に対する読者の関心はあおられ、いわばそれが作品の牽引力となっている。しかしその事に比して、では何故兄が「かうも変つた」のかについては、この作品は結局、最後まで全く明らかにはしない。家出後、兄が一体どこに住み、何をしているのか、それは謎のままであり、ただ、家出前には「如何にも自信のないオド〳〵した眼なざし」（三十五）の兄が、九年後「柔かい、そして温かい感情を含ん」（三十五）だ、「見すぼらしい姿、トボ〳〵とした歩み、そんなものを越えた眼なざし」（三十五）、「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」（三十七）を獲得していた事だけが明らかにされるのである。

ここで、次頁の資料1を参照して頂きたい。表の下段の作者自身の年譜と比較すると、「或る男、其姉の死」の兄の年譜は作者のものと、多少の年齢の差を生じつつも殆ど一致している事が見てとれよう。その中で（作者の）事実と、作中の記述が明らかに異なると考えられる点を年代順に見ていくことにする。すると、まず第一に、実母が亡くなる際の年齢の違いがあげられる。これは作者の事実では十三歳における出来事であるが、作中の兄の場合は「八つ」（七）、もしくは「九歳」（十七）に実母は死去したとされる。おそらく、この改変は十歳違いの弟という、虚構の語り手を設定したことに関わっているかと思われる。既に実生活において、父との和解をなしていた作者は、当作品を「父と私との不和の心理を出来るだけ追求し、それを弟が両方に同情をもちながら、批判的に書いた」[8]ものと解説している。また別のところでも「自分が弟の立場に立って抜け目なく見よう」[9]としたと述べているが、実際、そうしたもくろみにおいて、兄と父の関係を或る程度客観的、批判的に分析し得、またその確執の事実をある程度、語り手の弟が目の当たりにして記憶しておくためには、兄とあまりにも年齢が離れていると都合が悪い。よって作者の事実よりも早く母は死去する事にし、新しい母が、十歳違いの弟を生む必要性があったと言える。この他、高等学校入学時期が、兄の年譜では作者のそれよりも二年早まっているのは、作

資料1「或る男、其姉の死」の兄の年譜と作者の関係

兄の年譜	対応する作者の年譜
二月、北のほうの小さい町で生まれる 兄の上の兄は前年、三つの秋に夭折	(M16) 二月二十日、宮城県で次男として生まれる 兄直行は前年十一月満二歳八か月で夭折
3歳 上京、祖父母の手に渡される	…3歳 (M18) 上京、祖父母の手に渡される
8、9歳 実母死去、新しい母来る	…13歳 (M28) 八月三十日、母妊娠悪阻のため死去 九月、学習院中等科へ進む 秋、新しい母来る
13歳 中学入学	
(18歳) W川沿岸の鉱毒問題で父と激しく衝突 →その前年	…19歳 (M34) 渡良瀬川沿岸鉱毒問題で父と衝突
19歳 高等学校入学	…21歳 (M36) 九月、学習院高等科に進む
22歳 大学入学、その正月、祖父死去 夏、制服の事で父と衝突 父の誘いで銅山を見に行く	…24歳 (M39) 夏、一月十三日、祖父死去 大学の制服の事で父と衝突 父に誘われて宮城県の銅山を見に行く 九月、東京帝国大学に入学
23歳 夏、女中C(千代)との結婚騒動 秋、父に貰与金分配法の不平を訴える男と交渉する	…25歳 (M40) 八月二十二日、女中の千代と結婚を約し、この結婚に反対する父、祖母、義母らと争う
24歳 徴兵検査甲種合格、入隊後免除 大学中途退学、この時案外父との衝突なし	…28歳 (M43) 徴兵検査甲種合格、入隊後免除 大学中途退学、この時案外父との衝突なし
25歳 短編集出版、将来の事について父と衝突、父に自活を迫られて小豆島に行く	…30歳 (M45・T元) 短編集出版、将来の事について父と衝突、自活を迫られて尾道に行く
26歳 赤城山で木から転落し、重傷を負う 結婚話、父の反対により破談	…31歳 (T2) 山手線の電車にはねられて重傷を負う
	32歳 (T3) 結婚
28歳 家出	33歳 (T4) 父の家より離籍
九年後	35歳 (T6) 父と和解
(37歳) 姉の死の際、兄と弟が再会する 兄は死に反抗しない代わり、決してそれに打ち負かされないようなまなざしを獲得している	37歳 (T8) 十二月十六日、「或る男、其姉の死」の五回分の原稿を新聞社に送付 38歳 (T9) 一月、「或る男、其姉の死」の連載始まる

※表中の年齢は数え年である。
(　)内の年齢は作中の記述より推定し得る数値である。

者が中等科時代二度留年したためである。それに加えて作者の二十六、七歳の時、特に記述すべき父との不和のエピソードが存在しなかったため、徴兵検査の時期では計四年、作者の事実と兄の年齢とは差がひらくことになっている。

また別に、出来事の内実は作者の体験に基づきながら、表面的な改変を行ったものがある。大正元年に実行された作者の尾道行きが小豆島行きに[9]、大正二年に作者が電車にはねられて大怪我をした事が、木から転落した事に[11]改められた点である。これは周知の事でもあるが、作者の尾道行きは「暗夜行路」（T10・1～S12・4）に描かれ（この作品は「或る男、其姉の死」よりも発表は後だが、「或る男、其姉の死」に先がけて、尾道行きの設定、構想が練られていた[12]）、また作者が電車にはねられて大怪我をした事は「城の崎にて」（T6・5）に主として既に描かれた事である。よって、作者が他作品との重複を出来るだけ避けるためにとった便宜的処置と考えられる。

このような、他作品との重複をなるべく避けるための処置は、作品十四章において女中Cとの結婚騒動を、語り手の弟が省略する点にも当該するように思われる。それまで兄と父の主たる不和の出来事を詳しく語ってきた弟は、本来ならば二人が「烈しい衝突をし」（十四）たという、この騒動について語っていいはずである。ところがそれは何故か「然し此衝突に就いては略します」（十四）と打ち切られる。作中で内容を略すくらいならば、最初からその出来事について全く触れなければいいようにも思われるのだが、実は既に、この省略に当たる部分を描いた作品「大津順吉」が存するのである。よって、このいささか唐突と思われる省略は、作の必然というよりも「大津順吉」との重複を避けるという、作者の事情に基づいて行われたものと考えられる。

自身の事実を作品化する作家の、ある程度まぬがれ難い事情かもしれないが、作者は既に他で描いた事との重複を、出来るだけ回避しながら、これまで殆ど描かれなかった出来事について主に語っていこうとしている。しかし、当作品でそのような方法を取り続ければ、どうなるか。大正三年の結婚から、大正六年の父との和解までの作者の事実は、既に「和解」に描かれている。もしも作者が、これ以上自身の年譜を追う形で、このまま兄の行く末を描けば、「和解」との重複は避け難い。ここで作者はどうしても自分とは異なる新たな兄の年譜を作り出す必要性に迫られるのである。いわばその打開策が、兄の家出、それも行き先の全く分からぬ、また何をしているかも分からぬ家出の設定ではなかったか（実際この設定によって「和解」との重複は避けられている）。この作者にとっては実に都合のいい方法である。拠るべき事実がなく、またそれに代わるものを持っていない作者は、語り手（弟）にも兄の事は何一つはっきりとは分からぬという事にして、事態を収拾するのである。

二

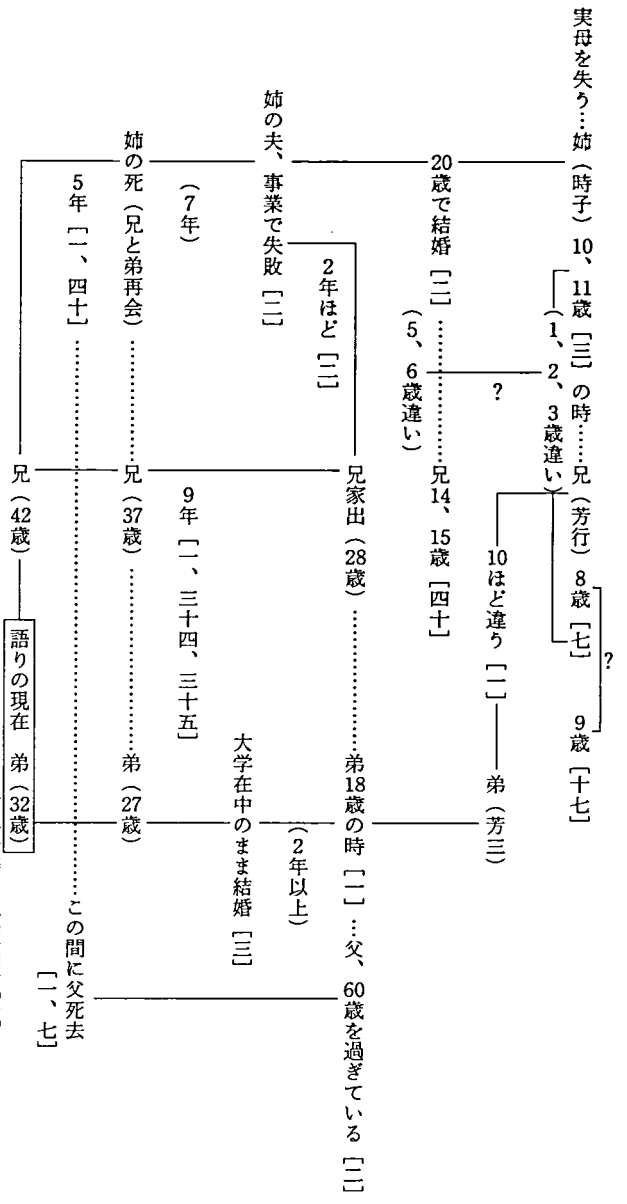
しかし、その結果、作品は家出後の兄を、何か神秘的で、不思議な点の多い人物として印象づけるものの、前半に主として語られていた、父と争う兄の様子の、瑣末な記述との落差を感じさせていよう。そして、きっと生きていれば何等かの形で決着をつけざるを得ない父との関係も、姉の死から五年の間に父が亡くなるという形で終止符が打たれている。しかし、それも作者が拠るべき事実がないため（書いている作者は父と和解している上、当時父は健在）か、父の亡くなった、はっきりした期日、その亡くなる際の様子、死の原因すら何も弟の口からは語られていない。作品の大半で父と兄の関係をこまやかに追ってきた弟とすれば、その関係の終焉である父の死という事実を、もう少し詳しく語る方が自然ではないだろうか。

「事実と作り事との混合」という方法の歪みは、登場人物の年齢設定においても生じる。ここで次頁の資料2を見て頂きたい。実母を失った際の兄の年齢は、七章では「八つ」とされ、十七章では「九歳」と記述される。この時の兄の年齢はどちらなのか、結局はっきりしない。また、同じく実母を失った際の姉の年齢は三章で「十か十一の時」とされているため、ここから兄との年齢差は一～三歳と考えられるのに対し、四十章では「姉の結婚時」、兄は「十四五」歳とされている。姉が「二十歳」（二）の時に結婚したという記述からすれば、ここで兄と姉の年齢差は五、六歳にひろがる事になり、それ以前の記述とつじつまが合っていない（この兄と姉の年齢差の誤りについては既に宮越勉氏の指摘[13]がある）。年齢設定に誤りをきたしているのは、すべて作者の事実とは異なる「作り事」の部分である。前述したように、実母の死は作者の実際よりも早められているのであり、また姉は実際には存在しない人物であった。

このように当作品の「作り事」の部分はやや貧弱な様相を呈していると言えるが、或いはこうした「作り事」の不得意さを自覚していたかもしれぬ作者が、その自覚故に、自己の経験をそのまま用いる事の出来ない兄の二十八歳以降の動向を、行方不明という方法で処理しようとしたのかもしれない。ただ、ここで疑問となるのは、兄の二十八歳以降は（「和解」と重複するため）事実に拠る事が出来ないと、誰よりも承知しているはずの作者が、何故に「和解」以前の事実のみで作品を収束させようとしなかったのか、ということである。作者にはそうした選択も可能だったはずである。少なくとも、父との「不和を主にし、丹念にその原因を追及して書[14]」くことのみを目的とするならば、兄の家出以降の顚末を描く必要性はない。

改めてここで着目したいのは、姉の死という出来事に際して兄が弟と再会する時が、兄の家出から「九年目」に設定されていることである。実はこの「九年」という年数は、「或る男、其姉の死」を描いている作者と、作中の兄とを同年齢（三十七歳）にする設定に

資料2　「或る男、其姉の死」の登場人物の年齢関係



※［　］中に示す漢数字は、人物の年齢、或いは出来事間の経過年数が明記されている章を表す。
なお（　）内の年齢、年数は作中の記述より推定し得る数値である。

他ならない。（「或る男、其姉の死」の発表時、作者は三十八歳であるが、前年度に大阪毎日新聞社に少なくとも「或る男、其姉の死」の第五回分までを送付していることが書簡から確認できる。[15] また兄の家出から姉の死までが「九年間」であることは第一回の内容冒頭に記述されている。）

作者は姉の死、そして兄と弟の再会という「作り事」（いわば、何年後にしてもよい事）を、自身の年齢と兄のそれを一致させる形でわざわざ設定した。二十八歳以前の兄の年譜が殆ど、作者のそれをなぞるように設定されている事を考えれば、家出から九年後、兄が獲得している「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」（三十七）とは同年齢の、書いている作者のそれが反映されたものと、ひとまず考える事が出来るだろう。作者は主として「和解」以前の出来事を当作品に描きながらも、実は作品を書いている「和解」以降の現在の自分の心境も兄のそれとして反映させたかったのではないか。そのためには「和解」で書かれた内容以前と、以降の出来事（つまり作者の現在）を結ぶ兄の経歴が必要であった。それが兄の行方知れずの家出ではなかったか。

三

志賀直哉の作品には、「或る男、其姉の死」の兄と、殆ど同様の変貌を一作の内に見せる登場人物が、実は他にもう一人いる。それは「暗夜行路」の時任謙作である（この兄と時任謙作の獲得する眼なざしが「同質のもの」であるとの指摘を、既に中村完氏が行っている）。[16]

「暗夜行路」において、時任謙作の「眼なざし」は大きく変化する。自身の出生の秘密を知り、段々と精神的に追い詰められた謙作の様子（前編第二・十三）が次である。

そして彼は同じ電車の誰よりも自身を惨めな人間に思はないではゐられなかった。兎に角、彼等の血は循環し、眼にも光を持ってゐる。が、自分はどうだらう。自分の血は今ははつきり脈を打って流れてゐる血とは思へなかった。生温く、只だら〳〵と流れ廻る。そして眼は死んだ魚のやう、何の光もなく、白くうぢやぢやけてゐる、そんな感じが自分ながらした。

これは「或る男、其姉の死」で言えば、

「他人にどんなに厭がられたって、それだけなら生きて行けない事はないが、自分で自分が厭になるともう死ぬより仕方がない」兄は充血した如何にも力のない眼つきをして私にこんな事をいった事がありました。丁度それは自家を出る一ト月ばかり前の事でしたが、其頃のおど〳〵とした全で自信のない兄の様子を見ると、私でも「これは全く堪らなさうだ」といふ気がしたのです。（三）

にあたる部分であろう。そして「暗夜行路」最終部で、謙作が大山

でひどく衰弱し、旅に出てから初めて妻直子に会う場面が次である。

謙作は黙って、直子の顔を、眼で撫でまはすやうに只視てゐる。それは直子には、未だ嘗て何人にも見た事のない、柔かな、愛情に満ちた眼差に思はれた。

「もう大丈夫よ」直子はかう云はうとしたが、それが如何にも空々しく響きさうな気がして止めた程、謙作の様子は静かで平和なものに見えた。(後編第四・二十)

一方、「或る男、其姉の死」で、家出をしてから九年ぶりに弟と再会した兄の様子は次のように描かれている。

兄はなつかしさうに私の顔をぢつと見入りました。其眼は柔かい、そして温かい感情を含んで居ましたが、それにかかはらず、ぢつと見られると私は変な圧迫を感じました。それは兄が家出をした頃のあの如何にも自信のないオド〳〵した眼なざしではありません。私の全く予期しなかつたものでした。見すぼらしい姿、トボ〳〵とした歩み、そんなものを越えた眼なざしでした。(三十五)

右のように照らし合わせる時、追い詰められる直接の原因は異なるにせよ、自分で自分が嫌になった人間がその状況を打破し、落ち着いて静かな、澄み切った心境に達している点、それをあらわす「眼なざし」を得ている点では、少なくとも二作品は共通点を持っている。「或る男、其姉の死」の弟を驚かした兄の変貌、そして弟に「無意義な生活をして居るのではない」(四十)と信じさせた印象深い兄の眼は、「暗夜行路」最終場面で妻直子によって認められることになる、時任謙作の変貌の先取りとしてある。

ただ、「暗夜行路」において、時任謙作の「柔かな、愛情に満ちた眼差」が描かれるに至るには、大正十年の発表開始から、昭和十二年まで待たれなければならなかった事は周知の通りである。「暗夜行路」の後編執筆が極めて難渋し、特に謙作が最終的に達した境地を描く結末部分(第四・十六〜二十)は、それ以前の部分の発表から実に九年間の時を経て、やっと完結をみる。こうした事情は「暗夜行路」の後編に利用できる原稿が前編ほどには存しなかった上、「実感したものでなければ書かぬかたくなな信条」(三好行雄氏)[17]を持ち、「実感を一つの方法とまでした」(亀井雅司氏)[18]と目される作家、志賀直哉にとって「作者が主人公の心境を追う時間が必要」(三好氏)であったが故に生じたと考えられている。

このような考えにのっとって、「暗夜行路」の成立過程、言い換えれば、時任謙作の変貌を描くに至るまでの長い道程をみる時、大正九年の段階における同じ作者が、謙作の最期に通じるような兄の変貌を既に描いていたことを、果たしてどのように理解すればよいのか。

ここで思い起こされるのは、「或る男、其姉の死」では、兄の変貌は結果として描かれているものの、何故に兄は変わったのか、ま

たその変化は如何なる経過をたどって獲得されたものなのかが、全く記述されていなかったことである。「或る男、其姉の死」におけるそうした課題は、兄の行き先知れずの家出によって書かずにすまされている。「暗夜行路」の難渋ぶりから、逆照射すると、「或る男、其姉の死」執筆段階の作者は、兄の変貌に通じるような心境を自身が得ていたとしても、兄の変貌の所以、変貌の過程を第三者に納得し得るかたちで描くには、まだこの時期は早急であったと言える。作者は賢明にも、兄の家出という設定を用いて、十分には書けないであろう箇所を書かずにすます方法を選択しているのである。

「或る男、其姉の死」は、既に父との和解をなしとげた作者が、「和解」以前の事実を主に取り扱っている事から、「徹底的に過去の問題を扱うことで、その意味を現在や未来から封じ込め」、作者にとって「何ら現在的な意味を持ち得ないもの」（荒井均氏）[19]と、思われがちである。しかし、実際にはそう簡単には言えないのではないか。むしろ兄の行き先知れずの家出という、この作品で用いられた「作り事」は作者が父と争った過去のみならず、自己の現在の心境をも兄に仮託して語ろうとした時にどうしても必要となった手段であったように思われる。

そして、この兄の変貌に着目した時、弟という虚構の第三者の語り手は、作者と父との不和を出来るだけ客観的に描こうとする際に必要となる手立てであっただけではなく、実は最終的に兄が至っている境地、それが現れている「眼なざし」を認めるために必要な人物設定であったと言える。[20]

また、弟に「人の一生がこんなにして終らねばならぬといふ事は恐ろしい以上、物凄い感じ」、「死が永遠の闇なら人生は高原での寒い日の薄暮といふやうな気」、「少くも姉にはそれは実際にさうだつたと云ふ気」（三十七）をさせた、虚構の姉の死とは、行方不明の兄を呼び寄せ、かつその兄の獲得した「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」（三十七）を際立たせるための格好の装置であったように思われるのである。

「或る男、其姉の死」は、独立した作品として読むにはいささか破綻をきたしている箇所を確かに持つ上、平板な説明が作の大半を占め、そこから生々とした感動を読者に与え得ていないという点で、成功した作品とはとても言い難い。ただ、作者の立場にくみした時、彼が自己の現在の心境を、何とか兄の変貌に仮託して描き出そうとした、その試みが「事実と作り事との混合」という方法に見て取れる点では興味深い。そしてそれは、結果的に、時任謙作の最期を描くまでに成熟をとげる前の、過渡期の作者の位置を知らしめてもいるようである。「事実と作り事との混合」という方法は、「暗夜行路」においても用いられる。果たして、そこで「或る男、其姉の死」での創作経験はどのように生かされていったのか。この事はまた別の機会に考察してみたい問題である。

注

「或る男、其姉の死」、「暗夜行路」本文、及び作者の言の引用は、岩波書店版『志賀直哉全集』（S48・5～S59・7）に拠った。但し、漢字は新字体に改めた。

（1）原題は「或る男と其姉の死」であり、大正十四年四月、改造社より刊行された『雨蛙』の末尾に収録の際、改題されている。

（2）「志賀直哉論Ⅲ―『和解』と『或る男、其姉の死』―」S52・3『広島女子大学文学部紀要』

（3）S13・6『改造』

（4）「『和解』はしがき」（S23・8『現代日本文学選集Ⅰ』細川書店）の中で作者は「姉といふ架空な人物などを出して、私の実生活とは離れたものにした」と述べている。

（5）「『或る男、其姉の死』試論―〈姉〉の存在をめぐって」S57・10『一冊の講座　志賀直哉』有精堂

（6）明治四十五年一月十三日の夢を指す。この時見た夢を、姉の死の描写に利用している事は、志賀自ら、座談会『作家の態度―志賀直哉氏をかこんで―』（S23・6、7『文藝』）、対談「緑蔭閑談」（S39・8『日本の文学　志賀直哉（一）』付録　中央公論社）において語っている。

（7）「『或る男、其姉の死』の問題」S44・5『女子大国文』

（8）注（4）に同じ

（9）対談「緑蔭閑談」S39・8『日本の文学　志賀直哉（一）』付録　中央公論社

（10）注（9）の対談で、志賀は「小豆島に行ったことはない」と述べ、聞き手の網野菊が「或る男、其姉の死」の小豆島行きについてたずねると、「小豆島って書いてあった？　それじゃ、尾道へ行ったのをそう書いたのかもしれない」と答えている。

（11）作者は「創作余談」（S3・7『改造』）において、電車にはねられて重傷を負った体験を「或る男、其姉の死」の中に書き入れたと述べている。

（12）「或る男、其姉の死」の構想以前の執筆と考えられる、「暗夜行路草稿33」に既に「暗夜行路」のあら筋が記され、そこに尾道行きが設定されている。

（13）「志賀直哉における父子対立の問題―『或る男、其姉の死』を中心に―」S57・10『文芸研究』〈『志賀直哉―青春の構図―』H3・4武蔵野書房〉所収

（14）細川書店版「『或る男、其姉の死』あとがき」S21・12

（15）大正八年十二月十六日付薄田泣菫宛書簡

（16）「『暗夜行路』と『或る男、其姉の死』」S50・10『日本近代文学』

（17）「仮構の〈私〉―『暗夜行路』志賀直哉」S40・3～8・11・12『解釈と鑑賞』〈『三好行雄著作集第五巻　作品論の試み』H5・2　筑摩書房〉所収

（18）注（7）に同じ

（19）「或る男、其姉の死論」S57・6『国語展望』〈『志賀直哉論』S60・12　教育出版センター〉所収

（20）杉山雅彦氏に、九年振りの再会の場面での弟が「微頭微尾、兄を『見る』存在として機能し」ているとの指摘がある。

（「『或る男、其姉の死』論―『或る男』という枠組―」H5・5『文芸と批評』）

――しもおか・ゆか、本学大学院博士課程後期在学――